

スウェーデン 環境ニュース

Vol. 7 2003年 4月号 ページ1/3

多くの自治体でシックハウス

室内環境が劣悪なため、中で過ごす人の健康に被害をおよぼす建物は「シックハウス」と呼ばれています。アフトブラーデット

(Aftonbladet) 紙が4月末の4日間連載で、このシックハウス問題を取り上げました。同紙は全国の290自治体を対象に電話調査を行い、シックハウスの被害状況の把握につとめました。各自治体が過去5年間に、新築建物における建設方法の誤りを発覚した、もしくはシックハウス対策が必要な経験があるかを尋ねたものです。多くの自治体では現状をあまり把握していないことが明らかになり、次のような結果になりました。

152自治体 (52%)

「シックハウスがある」と答えた。

46自治体 (16%)

「新築の構造ミスを発覚した」と答えた。

76自治体 (26%)

「どちらもの問題がない」と答えた。(この理由には新築が少ないことも含まれる)。

合計244 (84%) の自治体が湿気や、カビ、換気の問題に関する苦情を受け付けています。

同紙が初めてシックハウス問題を取り上げたのは1982年でしたが、当時はあまり知られた問題ではありませんでした。その頃の議論の結果、政府は「一戸建て住宅被害委員会」(Småhusskadenämnden) を発足させました。同委員会はいわば「湿気とカビによる被害のための基金」だと言えます。この委員会は1986年に発足し、一戸建て住宅の湿気とカビによる被害対策に補助金を出しています。そして開始以来、13,000件の補助金申請がありました。去年は323軒に合計2,150万SEK(約3億1648万円)の補助金を充てることが決定されました。補助の対象は、1989年以前に建設さ

れ、使用期間が25年未満の一戸建て住宅です。

その後、有害な液体充填剤の使用や、学校建物における「シック学校」の問題が議論されてきました。近年で特に話題になったのは、ストックホルム中心部に建設されたモダンアート博物館です。カビが発生したことが原因で休館を余儀なくされ、臨時の博物館建物への引っ越しとカビ対策に1億1000万SEK(約16億1920万円)もかかり、スキャンダルとなりました。

(Aftonbladet紙03/4/28, 5/1, Småhusskadenämndenホームページ)

4才児の40%にアレルギー

スウェーデンではアレルギーに悩む子供の数が増加しています。ストックホルム県に住む4才児の約40%が何らかのアレルギー(喘息、湿疹、アレルギーによる鼻のカタル症状、食べ物アレルギー)症状に悩まされていることが、「バムセ」(Bamse)という調査研究プロジェクトで明らかになりました。このプロジェクトは同市在住の4,000人の子供を対象にしており、1994年に開始されました。当時生まれたばかりの新生児を定期的に、住環境と健康の視点からフォローしてきました。ストックホルム県が指揮するこの調査研究は、子供のアレルギーをテーマにしたプロジェクトとして、世界的に見て大規模なものです。調査対象児は、現在8-9才に成長しています。

4才児までの結果をまとめて判明したことの一つに、「劣悪な室内環境(カビ・湿気・結露)の中で生活する子供は喘息になるリスクが高くなる」ということがあります。また、この他に「母親が妊娠中にタバコを吸うと喘息のリスクが高くなる」、「母乳で育てると喘息のリスクが減る」などの傾向が明らかになっています。

子供が4才に成長した時点での状況は以下の通りでした。

喘息	7%
湿疹	20%
アレルギーによる鼻のカタル症状	11%
食べ物のアレルギーが推定されている	13%
いずれかの問題をもっている	40%
複数の問題をもっている	12%

(カロリンスカ研究所プレスリリース03/1/27)

つづく

発行/編集: Lena Lindahl (レーナ・リンダール) 編集協力: 土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先: 電話/ファックス: 03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

スウェーデン環境ニュース

Vol. 7 2003年 4月号 ページ2/3

1ページからつづく

ずさん工事で不健全・高額な住宅

シックハウスの原因では、ずさんな工事や施工ミスが多くを占めます。建設の際の施工ミスなどを調査した研究者によると、建設プロジェクトにかかる費用は平均して約4.5%が、なんらかのミスを修繕するためのものです。工事が済んだ後に発見されるミスへの対策を含めると約10%になると推定されます。これらの費用は居住者が家賃で負担しています。

施主が費用削減などのために工事を急がせると、コンクリートの乾燥が不十分になるため湿気やカビが発生しやすくなったり、性質のよく知られていない建材から有害物質が排出したりするなどの問題が起きます。建物下の土壌、換気、メンテナンスがよくないこと等もシックハウスの原因になる時があります。施工ミスが意図的なものである場合は少ないですが、工事関係業者が関与しなくなった後に発見されると、所有者が高額な対策費用を負担することになるため、業者の責任が問われるようになってきました。

(Aftonbladet紙03/4/28, 29)

ベッドの保証期間は25年 住宅の保証期間はたった2年

新築住宅の保証期間はたった2年です。これはヘアドライヤーと同じ期間です。新しいベッドを買えば、その保証期間は25年間の場合があります。約100年使われる可能性のある住宅の保証期間が2年では、あまりにも短か過ぎると批判されていますが、建設業界は経済的に長期保証は難しいと反対しています。

2001年春、政府のイニシアティブで始まった取り組みが発端で、建設の品質向上と管理を推進する目的の「建設品質評議会 (Rådet för byggkvalitet)」という業界組織が発足しました。同評議会は、建設の保証期間を10年間にする

可能性と、その場合の効果を調べることにしています。ヨーロッパ各国では、建設の保証期間として2年から20年と様々なパターンがあります。

(Aftonbladet紙03/4/28、Vvs-tidningen energi&miljö 2003年4号、03/3/3、Rådet för byggkvalitetホームページ)

王冠収集でカワウソ保護

スウェーデンでは毎年、「王冠狩り」(カプシールヤクテン=Kapsyljakten)と呼ばれるプロジェクトが全国の学校で実施されます。ビール瓶などについている王冠を子ども達が収集して金属リサイクルに回し、楽しい環境教育を推進するのが狙いです。金属容器のリサイクルを行なうメタルクレッツェン (Metallkretsen) 社が主催しており、全国の小学校4年生と5年生の生徒が対象です。

初めてこのプロジェクトがスタートした1996年から2002年までの間に、子ども達は合計約355トンの王冠を集めてきました。子ども達はクラス単位で参加し、毎年5月1日から8月31日までの4ヶ月間王冠を収集します。各県で一番多く王冠を集めた優勝クラスには5,000SEK(約73,600円)、全国優勝のクラスには50,000SEK(約736,000円)の賞金があります。これら優勝賞金の半分は、クラスの子供達が選んだ環境保護プロジェクトに寄付することになっています。

2002年の「王冠狩り」に優勝したのは、スモーランド (Småland) 地方のヴェクシー (Växjö市にあるフルトー学校 (Furutaskolan) の5年生クラスでした。このクラスは1,670キロの王冠収集を達成しました。全国の342クラスが頑張った同年は、全国で収集量の合計が57トンになりました。

優勝したフルトー学校の生徒達は、賞金の半分をスモーランド地方のシンボルに使われているカワウソの保護のために使うことを決めました。世界自然保護基金 (WWF) スウェーデン支部のカワウソ・プロジェクトに寄付したのです。そしてWWFスウェーデン支部は、カワウソ保護に協力しているスモーランド地方の市民団体の活動にこのお金を使うことにしました。

カワウソは、100年前は多く見られた動物ですが、乱獲やPCBなどの化学物質汚染による繁殖障害、環境の悪化で少なくなってしまいました。現在では全国に1,600匹しか残っておらず、その狩りは禁止されています。

つづく

発行/編集: Lena Lindahl (レーナ・リンダール) 編集協力: 土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先: 電話/ファックス: 03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>

スウェーデン環境ニュース

Vol. 7 2003年 4月号 ページ3/3

2ページからつづく

1トンの王冠は、スウェーデンの子どもにわかりやすい説明で言えばボルボ社の乗用車（Volvo V70）1台分の鉄板に相当します。集められた金属はリサイクルされて、建設業や各種工場、自動車産業で使われています。デンマークとスウェーデンを結ぶ大橋でも、その鉄筋コンクリート内の鉄棒の一部に子ども達が集めた王冠が原材料として使用されています。（WWFプレスリリース 03/4/30、「王冠狩り」ホームページ）

デザイン業界の環境意識は低い

スウェーデン政府は、デザイン業界に大きな期待を寄せています。2005年を「デザインの年」とし、スウェーデンを世界に向けてデザインを発信する「デザイン国家」にすることを狙っています。しかし、デザイン業界の環境意識はまだ低いようです。

良いデザインを推進する目的で活動する非営利組織、スヴェンスク・フォルム（Svensk Form）は、毎年、家具や照明機具などのデザインコンペを開催しています。2002年はこのコンペの審査委員に初めて環境専門家を1名加えました。この環境委員は、スウェーデン最大の環境保護団体「自然保護協会（Naturskydds-föreningen）」の広報を担当する、テキスタイルデザイナーでもあるマリ・カ・ヨンソン（Marika Jonsson）女史でした。ヨンソン環境委員は、コンペ参加企業に、環境に配慮した製品開発や、ライフサイクルアセスメント、環境ポリシーなどに関する情報提示を求めましたが、これらの企業が反発しました。コンペの受賞品展示会に合わせて発行するカタログに、詳細な環境評価結果が掲載される予定でしたが、反発が激しかったため公開情報は1から4の評価点数の表示だけにとどまりました。

スヴェンスク・フォルムでは、コンペの環境評価を続けるかどうかは未定ですが、別の方式でもデザイン界の環境意識を高める取り組みを続ける

予定です。

（自然保護協会発行の「Sveriges Natur」誌 2003年2号）

個人住宅の薪暖房も許可制へ

エネルギー庁では、個人住宅を含む薪、チップ、木質ペレットを燃料とする暖房目的の焼却設備に対する規制を強化し、許可制にすることを検討しています。目的は、国民の健康を脅かしている大気汚染を抑制することです。同庁が打ち出した規制強化案が採用されれば、バイオ燃料の暖房器機の新設だけでなく、既存の焼却器機に対する許可申請も義務化されます。以前より薪を暖房利用して暮らしている国民などから反発が出ています。

薪などの焼却は、焼却する設備や燃料によって、大気汚染の排出状況が異なります。設備が古かったり、使用の際の環境配慮が足りなかったりすると、二酸化炭素の他に、一酸化炭素や微粒子、発ガン性の炭化水素類（タール）などが発生します。喘息や心臓・肺の病気を患う人が、特にこの煙の被害を受けやすいです。

現在、この規制強化案は、一部の自治体で回覧検討中です。エネルギー庁は自治体からあげられるコメントを検討した上で、今年の秋に政府へ改正案を提出する予定です。（Västerbottenskuriren紙、DN紙 03/5/3、その他）

世界バイオエネルギー会議を 2004年6月に開催

スウェーデンバイオエネルギー協会（Svebio）が2004年6月2日～4日、ヨンショーピング（Jönköping）市で、第1回バイオエネルギー国際会議・展示「World Bioenergy 2004」を開催します。この会議の前後には、スウェーデンのバイオエネルギー関連施設を視察するツアーも開催されます。

バイオエネルギー協会には300社の企業が会員になっており、スウェーデンのバイオエネルギー技術とそのノウハウの普及、輸出に力を入れています。世界会議は、今後定期的開催の狙いがあるということです。スウェーデンでは、1次エネルギー供給の5分の1がバイオエネルギーによるものです。

明細はこちらへ：

<http://www.elmia.se/worldbioenergy>

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール） 編集協力：土屋なおみ

年11回ファックス・電子メール発行、年間購読料5,000円、記事の転載をしたい方は連絡ください。

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019、<http://www.netjoy.ne.jp/~lena>